鳳凰堂阿弥陀浄土図と平等院庭園

Amida Pure Land picture on The HOODO reredos and The BYODO-IN garden

杉 本 宏

Hiroshi SUGIMOTO

宇治市教育委員会

Key Words: 1. 阿弥陀浄土図 2. 平等院庭園 3. 洲浜
Amida Pure Land picture The BYODO-IN garden SuHAMA

要 旨

本稿は、鳳凰堂仏後壁画に描かれる阿弥陀浄土図および平等院庭園の発掘調査状況を紹介し、阿弥陀浄土図の園池表現と平安期平等院庭園との関連性について考察を加えたものである。寝殿造庭園の様式的完成を背景として、理想的な庭園美として阿弥陀浄土図に洲浜形宝池が描かれ、また平等院に洲浜をあしらった浄土庭園が作庭されたことを指摘した。

Summary

This report deals with relation between Amida Pure Land picture painted on the HOODO reredos and the BYODO-IN garden of the HEIAN period.

Through the study, I pointed out between SUHAMA style pond depiction of Amida Pure Land picture painted on the HOODO reredos and JODO garden style on BYODO-IN garden of the HEIAN period related to completion of SINDEN-ZUKURI garden style.

1. はじめに

平等院は、永承7年（1052）に関白藤原頼通が宇治別業を寺に改めたもので、阿弥陀堂（鳳凰堂）は翌天喜元年に完成している。この永承7年は、当時の社会で末法の初年と考えられた年で、この末法の到来が頼通に平等院の創立を思い立たせたといつてよい。

阿弥陀の宝楼阁を模したとされる鳳凰堂と極楽さながらの内部荘厳、また堂を取り巻く自然と一体となって作庭された浄土庭園とが織りなす世界は「極楽いぶかしくば 宇治のみ寺をうやまへ」と謡われ、まさに西方浄土の有様を現世に移したものとして広く当時の人々に知られていた。

ところで、西方極楽浄土は浄土經典に説かれている観念的なものであるが、それを絵画として視覚化したものが浄土変相図である。この種の絵画は中国敦煌の壁画などをはじめ、わが国でも奈良時代以来、浄土曼荼羅や壁画などとして描き続けられ、人々が浄土の有様を具体的に思い描く最も有効な手掛かりとなっていた。

鳳凰堂仏後壁前面の一角に阿弥陀浄土図が描かれている。本小稿では、この浄土図と近年の平等院庭園発掘調査の成果を紹介しながら、両者の関連性を少し考えてみたい。

2. 鳳凰堂仏後壁前面壁画の概要

鳳凰堂中堂内部は、扉・壁に九品来迎図や日観想図を始めとして、床板以外の部材表面には鮮やかな彩色が施され、本尊である阿弥陀如来坐像を核として荘厳な極楽世界の空間が表現されている。ここで取り上げようとする阿弥陀浄土図は、本尊背後の母屋柱、いわゆる来迎柱の間に張られた仏後壁の前面に描かれたものである。この仏後壁画も他の鳳凰堂扉絵や壁画などと同様に剥落が認められ、全体が完存するわけではないが、阿弥陀浄土図部は壁面上方に描かれていることもあり、比較的良く旧状をとどめている。

鳳凰堂の絵画については既に多くの研究がなされており、近年では秋山光和氏により『平等院大観 第3巻 絵画』¹⁾として詳細な分析研究がまとめられている。ここでは秋山氏の研究を基にしながら仏後壁前面壁画の構成と年代を述べておきたい。

(1) 仏後壁前面壁画全体構図

仏後壁前面壁画は、来迎柱間に計11枚の壁板を縦に張り渡し、その表面に描かれているもので、その範囲は縦約340cm、幅約370cmである。

壁画の全体構図を簡略に示したものが第1図である。この略図を見れば解るように壁画は中央左寄りに華麗な仏殿とそこに参詣供養する唐風の三人の王侯と侍者・楽人達が大きな面積を占めて描かれ、仏殿の背後には高く聳える山塊、右側には山水、山塊の右方には海とも湖水とも思える水面が山塊の向こうにある景色として描かれている。

第1図 鳳凰堂仏後壁前面壁画の構成略図

ている。問題の阿弥陀浄土図は、この水面の右側水辺付近に縦約40cm、幅約60cmの範囲で描き込まれている。

仏殿も阿弥陀浄土も、画面の右上から見た俯瞰図として描かれているから、画面での方位は、阿弥陀浄土のある右上方隅が西、左上方隅が南、右下方隅が北、左下方隅が東として設定されていることとなる。この全体構図を見れば明らかのように、東面する阿弥陀如来を安置する現世の寺院とそこで行われる供養が構図の中心であり、阿弥陀浄土は西方彼方の久遠の距離を表現するように右上方隅に小さく描かれるにすぎない。

本来、仏後壁に描かれる阿弥陀浄土図は、本尊である阿弥陀如来の世界である阿弥陀浄土の有様が壁面全体に描かれるものであるが、鳳凰堂の場合はこのように仏殿とそこに参詣供養する唐風の三人の王侯という此岸の情景が壁面の主要部を占め、彼岸である阿弥陀浄土は彼方の世界として象徴的に描かれている特色がある。すなわち、鳳凰堂仏後壁前面壁画は彼岸の世界を表現するものではなく、此岸での供養は彼岸に連続するという、両者の観念的関連性を理想化した特異な主題に沿って描かれているのである。

(2) 仏後壁前面壁画の年代

鳳凰堂の完成年代は天喜元年(1053)であるが、現在の仏後壁画の年代は天喜元年より下ることが昭和の解体修理によって指摘されることとなった。

鳳凰堂は創建以来、幾度も改修が行われており、その変遷が大森健二氏によって「柱間装置の変遷」として『平等院大観 第1巻 建築』²⁾にまとめられている。ここでは、鳳凰堂中堂の変遷についての詳述を省くが、要は、当初の段階において仏後壁は土壁であり、第1回改造において前面が板壁に変更され、現在の壁画はこの改造に伴うものであるということである。

第1回改造の具体的な年代は確定されていないが、秋山氏は図様研究から「本来この位置に描かれるべき阿弥陀浄土図を画面右上に小さく幻想的に描き、主要場面には唐装の王者三名が供奉の諸臣と共に仏の宝殿に参入供養するという極めて特殊な図相」は「承保元年(1074)、頼通が八十四歳の長寿をこの地で全うして間もなく、供養と崇敬の象徴として理想化された頼通を改めてここに描き表したもの」と解釈し³⁾、絵画史的様式や技法を含め11世紀後半の製作と判定している。

3.阿弥陀浄土図の構成

鳳凰堂仏後壁前面壁画の概要は述べたとおりである。次いで、この壁画右上方に描かれた阿弥陀浄土図の構成を見てゆこう。なお、第2図はこの浄土図の概略を線画で書き起こしたものである

阿弥陀浄土図の全体的構図は、コ字形シンメトリカル配置の宝楼阁を中心に前面に阿弥陀如来他諸菩薩が座する華座段、そしてその前に反橋で翼廊前端的第二楼と結ばれる舞台を中心とした舞楽段となり、宝楼阁上方は2体の飛天、笙・横笛・多数の蓮弁が舞う虚空段となっている。宝池は華座段の左右から曲線の汀線が始まり、舞台前面は水面となっている。さて、もう少し詳しくこの様子を見てみよう。

(1) 宝楼阁

宝楼阁は壇正積基壇上に建てられており、建物配置中央の中堂は、重層入母屋造であり初層は桁行5間梁間3間と思われ、上層は桁行4間梁間3間となっている。中堂から左右に延びる第一翼廊は単層6間で、両端に重層方三間入母屋造の第一楼が付設されている。この両第一楼から直角に単層の第二翼廊が前方に延びる。間数は解らないが第一翼廊より短めに表現されているようだ。第二翼廊の前端は重層方三間方形造で上下吹き放ちの第二楼に接続し終わっている。ただ、第二翼廊と第二楼との接続は

直線的ではなく、鍵の手に第二楼が外方に逸れていることが北第二翼廊の基壇描写でわかる。屋根は本瓦葺に表現され、中堂・第一楼には鴟尾が、第二楼には宝珠がのる。また、南北第二楼初層内にはそれぞれ奏楽菩薩が2体ずつ描かれている。

(2) 華座段

中堂前に横長の露台である中台が置かれ華座段となっている。中台裾は水引幕で取り巻かれ、四周に高欄を付設している。中台中央に阿弥陀如来が座し両脇に脇侍菩薩が、その周囲に諸菩薩・比丘が11体描かれている。

(3) 舞台・反橋

華座段中台前の舞台は、池中から立ち上がる柱で支えられており、横幅・奥行きとも中台より狭く描かれている。舞台縁には高欄を付設し、鼻隠板には剣巴文があしらわれている。舞台両端中央から反橋が架けられ、南北第二楼と接続している。反橋は3本一組の4橋脚によって支えられ、舞台と同様に縁に高欄が、鼻隠板には剣巴文の装飾がつく。舞台上には4体の舞踏菩薩、反橋中央にはそれぞれ1体の人面相の鳥伽陵頻迦が描かれている。

(4) 宝池

宝池は、汀が洲浜様に描かれており、池は中台左右から舞台前方に大きく広がっている。中台左右部分の曲線的な汀は入江状となり、南北第二楼前面で屈曲しながら

第2図 阿弥陀浄土図（部分）書き起こし略図

左右外方に逃げて行く。第二翼廊・第二楼辺での汀線は明確ではない。北第二翼廊外方にも洲浜形の汀が描かれている。北第二翼廊基壇で隠れはつきりしないが、この外方の池と内側の池とが基壇下を通る細い流れで結ばれているらしいことは、反対側の南第二翼廊基壇内縁に入江から派生した細い流れ状の汀表現が接続していることから想定できる。この南第二翼廊に取り付く流れも基壇下を通り外方に続くと思われる。

中台左側の汀表現をみると、中台は池中に置かれているのではないようだ。いわば、中堂前面に張り出した前庭ともいえる陸地が存在し、この空間を占有して中台が置かれていると思われる。

舞台は前述のごとく池中に設置されている。中台・舞台周囲の池中には開敷蓮華や未敷蓮華が、南北第二楼前面にはそれぞれ4体の奏楽菩薩群が描かれ、また、南奏楽菩薩群の後ろには父子相迎会が描かれている。

(5) 平面配置の想定

さて、この阿弥陀浄土図の構造物と池との関係を平面的に想定復元してみたのが第3図である。もとより、阿弥陀浄土は創造的産物である。しかも絵画として斜め上から俯瞰して描かれている。これを平面図にすること自体、大胆な話ではある。

しかし、建物を見ても解るように、表現は一定の現実的理解の上に立っており、細部に拘らなければ大まかな平面図への転換は不可能ではない。そして描き手が表現しようとしたであろう構造物と池との関係を知ろうとするためには、この方法が効果的であると思う。ただし、絵画の図への転換は、読み手の主観が大きく働くため、各部の相対規模や描かれていない部分の想定は読み手、すなわち筆者の想像を加えたものであることは言うまでもない。この想定平面図を基に、阿弥陀浄土の平面構成を整理してみると概ね次ぎのようになろう。

宝楼閣は重層の中堂を中心にコ字左右対称形に楼・翼廊を配置した建物であり、基礎部は基壇構造である。建物構造は前述したとおりであり、表現されていない第二翼廊の間数は5間と考えた。北第一楼端と南第二楼前面に階段が確認されるため、他の楼にも同様な階段が付き、おそらく中堂前面にも階段が付くものと思われる。

中堂前面には池に張り出した前庭があり、中台はこの前庭に設置されている。池は第二翼廊で囲まれた空間か

第3図 鳳凰堂阿弥陀浄土図の平面想定図

ら前方に大きく広がっている。張り出した前庭によって中台左右は入江状となり、汀線は南北第二翼廊・第二楼基壇近くを通りながら前面に向かって曲線的に広がっていく。この両入江部から南北第二翼廊に向かってそれぞれ流れがあり、流れは翼廊基壇下を潜って外方の池と連続している。中台前面池中に舞台が設置され、舞台と南北第二楼とは反橋でそれぞれ繋がっている。

なお、池汀線は曲線の洲浜様で自由な感じを受けるが、基本的には宝楼閣や諸菩薩の配置のように左右対称を指向しているとしてよい。また、汀が極端に入り組む表現は、絵巻に描かれる汀を見ても本来より誇張気味に描かれるのが一般的であろうから、描き手が現実理解していた池汀は平面想定図よりもう少し大振りな曲線であったと想像できる。

(6) 洲浜形宝池のイメージ

鳳凰堂阿弥陀浄土図の図相は、斜め上からの俯瞰図として描かれているという点を除けば、宝楼閣や華座段・舞楽段の様子は、従来の阿弥陀浄土図がそのイメージソースであろうことは想像に難くないが、この図が特色とする池汀の洲浜表現は従来の延長線にあるものではない。本来、阿弥陀浄土の宝池は、汀が直線的な方池として表現されるものであり、中国敦煌の壁画などをはじめ、わが国でも本例までの浄土曼荼羅などに描かれた宝池も方池として表現されている。

奈良国立博物館本阿弥陀浄土曼荼羅・高野山西禅院本阿弥陀浄土曼荼羅は、方池を基本としながら舞楽段前面のみが洲浜様で描かれ、大分県富貴寺大堂仏後壁阿弥陀浄土図は洲浜様の宝池となっているが、これらは平安後期から末期の製作とされている⁴⁾。

このような従来にない、鳳凰堂阿弥陀浄土図の独創的

な洲浜形宝池の表現には、平等院の庭園景観が反映しているのではないかと秋山氏⁹⁾はみている。すなわち、鳳凰堂の第1回改造に伴って描かれたこの仏後壁画には、平等院の景観が投影される機会は十分であり、この寺への期待を描いたとも思える特異な壁画の主題を考慮すれば、現実の庭園景観が図相に影響を与えた可能性は高いものと考えるのである。

4. 平安期平等院庭園の復元

さて、この阿弥陀浄土図が描かれた時の平等院庭園はどのようなものであったのか、近年行われている平等院庭園の発掘調査で検出した遺構の状況から、当時の概要を想定⁶⁾したい。

(1) 平等院庭園の変遷

平成2年度から始まった史跡・名勝平等院庭園保存整備に伴う発掘調査は、現在実施途中にあり、庭園の全容を確認し終えたわけではないが、今までの調査の中で一定の変遷過程を想定しうる段階にはなっている。

現在の平等院庭園は、庭園と宇治川との間に築かれた堤防によって景観が遮断され、閉ざされた空間に存在する格好となっているが、本来は宇治川そして対岸の山並みが境内から一望できる、東に向かって開けた景観を有していた。平等院庭園の改修は創建以後、平安後期・中世後期・近世前半・明治の4期で大規模に行われたことが想定できている。

現在の庭園は、平安期を基本としながらこれらの改修が累積複合したものとしてよい。これら各期の改修は、一貫として池の埋め立てと庭の高上げが行われており、現状の園池は創建当時より一周り狭くなり、庭園も1～2m程高くなっている。また、池岸が現在のような芝付きとなり、部分的に石垣積みとなったのは近世前半、おそらく寛文10年（1690）の鳳凰堂修理以降のことと考えられる。

現在の調査成果の中から復元できる平安期平等院庭園は、Ⅰ期とⅡ期に分けて把握することが可能である。

(2) 平安Ⅰ期の平等院庭園

Ⅰ期は創建の永承7年（1052）から鳳凰堂対岸に小御所が建てられるまでの間である。後述するように小御所が建てられた年次は、上限が頼通が没した1074年であり下限が1087年と考えられるから、概ね頼通在世中がこのⅠ

第4図 平等院周辺の地形と旧寺域想定図

期に相当する時期となる。当期の概要は次のとおりである。

Ⅰ期での鳳凰堂が建つ中島は、かろうじて鳳凰堂が建つ程度の小さなもので、岸を洲浜が巡っている。島の平坦部は、中堂前面の階段と灯籠間の狭い前庭だけであり、他は基壇近くまで洲浜が取り付いている。園池は、南岸が鐘楼辺りの段丘崖まで広がり、北岸は現在より4～5m程北に広がる。東岸は、鳳凰堂対岸南寄りに礫敷きの細い出島様岬が突出し、中堂前面は現在と違って大きく水面が広がっている。園池と宇治川との間は、一面の礫敷きが配され、池岸は段丘崖がある南を除き洲浜となり、所々に景石が置かれているらしい。

中島の北池中には小島があり、ここに反橋と平橋を架け岸と連絡し、南端にも反橋が架けられていた。また、北翼廊前面池中にも小島の存在が想定される。鳳凰堂後ろの後池は西北方向に延びるが、その範囲は解らない。この頃の庭園標高は15.5m、中島標高は16.3m程であり、現在とは逆に中島の方が高くなっている。鳳凰堂は更に基壇上に建てられているため、まきに見上げるような

(3) 平安Ⅱ期の平等院庭園

さて、小御所の建築年次についてであるが、史料的には確定できない。しかし、次の記事からその上限幅は知ることができる。

この時、後冷泉の鳳凰堂礼拝に際して、池中に錦繡の
仮屋が設けられている。小御所は、史料が示すように鳳
凰堂礼拝に使われる建物であり、治暦三年に礼拝用の錦
繡仮屋が必要であったことは、この段階では小御所はま
だ建てられていなかったことを示していると見て良いだ
ろう。したがって、小御所建築年次は治暦三年（1067）
から寛治元年（1087）までとなるが、私はこの間の承保元年
（1074）二月二日に頼通が没していることを考えると、更
に承保元年（1074）から寛治元年（1087）までに限定で
きるものと考えている⁹⁾。

5. 阿彌陀淨土圖と平等院庭園

しかし、両者を直接比べたとしても、宝楼型式建築の

したがって、この阿弥陀浄土の図相と現実の平安Ⅱ期平等院庭園とを直接比べるのではなく、平等院で執り行なわれた法会の様子を当時の庭園状況で把握し、まず平等院の性格を再確認したい。そして、両者の類似性がどのような底流に関連しあっているのか、少し考えてみることにする。

ここで取り上げる法会は、元永元年(1118)閏九月二十二日に行われた十種供養である。この供養の有様は『中右記』に詳しく述べられており、しばしば平等院研究の中で取り上げられるものである。

記録される仮施設設は、まず小御所南に4間仮屋、その南に幄舎の楽屋、鳳凰堂前面池中に舞台、舞台と岸を結ぶ橋が主なものである。小御所は頼通の娘で後冷泉皇后であった四条宮寛子等、4間仮屋は関白忠実等公卿殿上人の座である。僧のために本堂川辺透廊（釣殿）辺りと経蔵の方向に集会所が設けられている。

- 7 -

供養にあたっては前池の南北に竜頭鷺首の舟が浮かべられ、前池中と岸は「作蓮花水鳥樹林洲鶴砂鵠作立之。或桜花。或紅葉。水中岸上已無其隙」と記されるように、さまざまな作り物で埋め尽くされていた。舞台では菩薩・伽陵頻迦・胡蝶装束の舞や奏楽、堂や前庭では僧による読経や散華などの供養が繰り広げられ、この有様を四条宮寛子や忠実等一門が高覧したのである。

この供養記事で注意しておきたいことは、前池に舞楽段を思わせる舞台を設置し、池中・岸には蓮華や鳥・樹木の作り物を置くなどの荘厳を施し、阿弥陀浄土図と構成上極めて類似した状況での法会が実際に行われている、という点である。

(2) 極楽世界之儀を移す

平等院は、浄土曼荼羅に描かれた情景を現実を作り出したものだ、と良くいわれる。たしかに荘厳な彩色・絵画の内部装飾をもつ宝楼型式建築の鳳凰堂を中心として園池が配されるという構成は、浄土曼荼羅の2次元的表现を3次元の中に現実的な選択をしながら再構築したものとしてよいのであろう。

ただ、平等院における極楽世界の再現性という点についていえば、元永十種供養の有様にみるように儀式が執り行なわれる場合に、その再現性が際立つことに注意を向けておきたい。

これは、法会という儀式行為の執行によって、平等院へ付託された期待が顕在化しているのであって、このような儀式行為の中で発現される情景が、平等院に強く求められていたことを示している。

「造弥陀如来之像。移極楽世界之儀」という一文は、『扶桑略記』康平四年(1061)十月二十五日に記載された平等院塔の完成供養記事のものであるが、いわば平等院に求められたものは、建物や仏像・絵画に写された阿弥陀浄土の表現だけではなく、法会などの行為に際立って発現される「極楽世界之儀」の情景演出であり、この明快で純粋化された再現性の向こうに阿弥陀浄土を観想できうという、確信に似た期待であったろうと考える。

(3) 阿弥陀浄土図との関連性

鳳凰堂の第1回改造に伴って描かれた仏後壁画は、秋山氏が指摘するように、このような平等院に付託された命題が理想化されて表現されていると思われる。そして、その特異な題材が従来にない図相を生み出したのであろう。

ただし、仏後壁画に描かれた阿弥陀浄土図にどの程度平等院庭園の現実的な景観が投影されているのか、両者の比較からはよく解らない。たしかにこの阿弥陀浄土図が採用する洲浜形宝池は、現象的には平安期平等院庭園が採用する庭園様式と同一ではある。しかし、描き手の脳裏にあったイメージソースが平等院庭園であったのか、この時代に各所で作庭されていた同様式の庭園全体のイメージであったのか、などということを知ることは難しいのである。仏後壁画の前述の主題が、平等院建立の主題に沿っていることを考慮して、平等院庭園の景観が阿弥陀浄土の有様の中に投影され、洲浜形宝池の表現がなされた可能性を否定はできない、と思うのみである。

それにしても、宝池の表現に従来の浄土曼荼羅にない洲浜形がなぜ持ち込まれたのであろうか。この問題を考えてみるときに、当時作庭された浄土庭園が、どれ一つとして方池を採用していないという事実が答えを用意しているように思える。

平安中期以降鎌倉期にかけて、末法思想を背景として盛んに造られた浄土系臨池式伽藍配置の寺院が採用した庭園(浄土庭園)は、既に言われているように、いわゆる寝殿造庭園の庭園意匠を基本的に受け入れたものであって、浄土世界の再現を他に先んじて最も明快に打ち出した平等院においても、前身の宇治別業時代に造られた園池を引き継ぎ作庭されている。

この当時には『栄華物語』に「この世のことと見えず、海竜王の家などこそ、四季は四方にみゆれ、この殿はそれに劣らぬ様なり」と描かれた高陽院を始め、庭園美をして人々を感嘆せしめた寝殿造庭園が存在している。

このような邸宅庭園様式が浄土庭園という寺院庭園へ大きな変化を見せず応用されていることは、現実的な選択として行われたというよりは、いわゆる寝殿造庭園の様式美が、当時の価値観の中で庭園の理想形として昇華しうほど成熟しており、この様式美が醸し出す世界の方が、より身近かに荘厳な宗教的雰囲気演出できえた、ということであろう。これは、現実の価値観に沿う空想世界の方が、空想をより増幅するというパラドックスでもある。

このように考えてみると、鳳凰堂阿弥陀浄土図が描く洲浜形宝池と平等院に作庭された浄土庭園とは同じ底流で結ばれている、といえるのであろう。

6.おわりに一壁画年代の感想一

以上、鳳凰堂仏後壁前面壁画に描かれた阿弥陀浄土図と平等院庭園の調査から窺える平安期庭園の様子を紹介し両者の関連性について少し考察した。

最後に、この仏後壁前面壁画の製作年代についての感想を述べ、筆を置くこととしたい。

現在の鳳凰堂は本瓦葺であるが、創建当初は瓦葺ではないらしいことが建築史学の立場から提起¹⁰⁾されている。近年の平等院庭園や旧境内域の発掘調査で出土する瓦を分析する中でも、創建期の瓦出土量が少なく、それより半世紀程新しい瓦が多量に検出されるということが解ってきた。

平等院修理に関係する史料は、康平三年(1060)の墨書銘がある鳳凰堂大虹梁下面鏡蓮華座金具を初めとして、貴族の日記などに散見できるが、『殿暦』が記す康和三年(1101)の忠実によるものが最初の大規模なものであったらしい。この修理によって鳳凰堂が瓦葺に転換した可能性は、前述の出土瓦研究の中でかなり高いものと判断¹¹⁾でき、同時に他の部分の改修も行われた可能性は十分推測できる。

この修理を沙汰した忠実は頼通の曾孫にあたり、院政が貫徹されゆく中で、衰退を余儀なくされる摂関家の権勢を必死に支え続けた人物である。彼が理想としたのは、道長・頼通時代の摂関政治全盛期に他ならない。そして、忠実はこの沙汰の数年前に父師通の病死に伴って氏長者を受け継いだばかりであり、数か月前には祖父師実を失っている。

このようなことと、仏後壁前面壁画に描かれた仏殿に参詣供養する三人の王侯に、頼通を始めとする一門が投影されているであろうとする秋山氏の指摘を考え合わせるとき、この壁画は忠実の康和三年の沙汰による平等院修理時に製作されたのではないか、という思いが私の脳裏をよぎる¹²⁾のである。

注・参考文献

- 1) 秋山光和編『平等院大観』第三巻絵画、岩波書店、1992。
- 2) 大森健二「柱間装置の変遷」『平等院大観』第一巻建築、岩波書店、1988。
- 3) 秋山光和「前言」前掲1)文献、13頁
- 4) 渡辺文雄「富貴寺大堂仏後壁画と浄土変相図諸本」『富貴寺』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館、1984。
- 5) 秋山光和「図様の解釈と製作年代」前掲1)文献、128頁注4。
- 6) 平等院庭園の保存整備に伴う発掘調査の報告書は、現在下記3冊が刊行されている。
杉本宏・荒川史『平等院鳳凰堂中島発掘調査報告』、宗教法人平等院、1991。
杉本宏・荒川史『平等院庭園発掘調査概要報告』、宗教法人平等院、1992。
杉本宏・浜中邦弘『平等院庭園発掘調査概要報告II』、宗教法人平等院、1993。
- 7) 杉本宏「平等院庭園の変遷」『浄土庭園と寺院』永福寺創建800年記念シンポジウム資料、鎌倉市教育委員会、1994。
- 8) 福田敏男「宇治平等院小御所に就いて」『考古学雑誌』第34巻7号、日本考古学会、1944。
- 9) 杉本宏「平等院古瓦の新相―河内系軒瓦の様相・年代・背景―」『平安京歴史研究』(杉山信三先生米寿記念論集)、杉山信三先生米寿記念論集刊行会、1993。
- 10) 村田治郎「鳳凰堂建築の研究史」『仏教芸術』31、1957
および鈴木嘉吉・大森健二「中堂」『平等院大観』第一巻建築、岩波書店、1988。
- 11) 杉本宏「平等院古瓦の新相―河内系軒瓦の様相・年代・背景―」前掲9)文献。
- 12) 秋山光和氏は壁画の成立の大きな可能性として「治暦四年(1068)以来弟の教通に関白を譲り老躯を養っていた頼通が、承保元年(1074)二月、八十四歳で世を去り」『翌春教通も薨去』する中で、関白職を継いだ頼通の嫡男「師実やその妹寛子大后らの心に、「父頼通が精魂を尽し浄土の莊嚴をこの地上に実現しようとした御堂の本尊後壁に、その往生にふさわしい理想の情景を描き出したいという希いが生れ」たと考え、その製作時期として『百練抄』承保三年(1076)十二月八日「関白(師実)供養平等院内阿弥陀堂」の記事を重要視している。(以上、秋山光和「図様の解釈と製作年代」前掲1)文献128頁)
筆者はこの可能性を否定するものではなく、中堂の第1回改造の年代が建築学的に創建後間もない時期という中では、当時の摂関家をめぐる状況からの類推として、忠実による製作ももう一つの可能性としてあげられることを示したにすぎない。